

の山は現在の三輪山であり、神体山として今も信仰されている。神が鎮座している山、森林などは神奈備と呼ばれ、神の鎮まる場所であるために禁足地となっている所が多く、自然林として古来の姿を残していることが多い。また、一般に自然の樹木が密生繁茂している区画を森と言うが、神が降臨して、鎮座する依り代となるような木が存在する特別な森は、『万葉集』にあるように社、神社と表記され、これらは今日にも神社、鎮守の杜と呼ばれる存在として残っている。

また、神道には植林文化や樹木に関する儀礼も存在する。『日本書紀』には素戔鳴尊による植林の記述があり、儀礼では樹木を伐採する前に神の許しを乞い、その伐採の最中の安全を祈願するものがある。神宮式年遷宮の際に行われる山口祭、木本祭、御杣始祭、御船代祭、仮御樋代木伐採式などは、古来よりの慣習を今もなお現代に伝え続けているものである。さらに、樹木を伐採した後の切り株に挿し木を行い、樹木の再生産を祈願する鳥総立てという文化があるが、その起源も古く、『万葉集』には「鳥総立て、足柄山に、船木伐り、木に伐り行きて、あたら船木を」という歌があり、これは好きな女が他人と親しくなってしまうのを惜しんだ歌であるが、このような表現が用いられた背景には、常用の習俗があったと考えられ、昔は鳥総立てが盛んに行われていたと考えられる。

このように日本が世界的にも有数の森林を保有している理由を考察してみると、古代から現在まで途切れることない神道の山川草木などに神を見出し、森林には神が鎮座していると考え、必要以上に樹木を伐採しなかったこと、樹木の伐採前後に儀

礼を行い、植林をするという文化を風化させることなく持ち続け、実行してきたことが現在の日本の森林状況に大きな貢献を果たしていると考えられる。

そして、神社及びその森林には国民の慰安、人情を養い、天然風景と天然記念物を残すなどの価値を見出すことが可能であり、また神社の古来より続く森林の植生を調査することによりその地域における最適な植林活動が可能であると考えられる。森林問題は政治、経済、自然環境など様々な要因があるが、その解決に重要な点は森林が貴重なものであるということを書物、儀礼、口伝などを用いて代々伝えていくことであろう。

古代神宮祭祀における聖体示現

新田佳恵子

古代神宮祭祀における「聖なるもの」の顕現について、太玉串行事の古儀を解釈し、その宗教現象を考察した。

古代の太玉串行事は、『皇太神宮儀式帳』に三節祭と神御衣祭、幣帛駅使の時に太玉串という櫛に木綿(ユフ)を付けたものを天八重櫛とともに使用したことが記載されている。

太玉串と天八重櫛は、神宮でしか用いられないことと、天八重櫛は内宮でしかないことから、この二つは天照坐太神の祭祀に係っている。そして、太玉串に使用される祝詞の「前」と「地名・場所」二稱辞竟奉が、本座ではなく、神を迎える神座を指し、迎えられた祭神と迎えた祭祀者とは近い距離にあるということが明らかになっている(白江恒夫『祭祀の言語』)。このことから、正殿ではなく、太玉串と天八重櫛に近い処に

「聖なるもの」を新たに迎えるという意識があったと考えられる。また、日本の神は祭祀によって変容することがあると確認されている(『祭祀の言語』)。このことから、太玉串行事の祝詞に「多々倍」「称辞」とあるので、天岩戸祭祀という神話の再現をすることによって、二度とお隠れにならない神の変容を願ったと解釈できる。

『皇太神宮年中行事』の時代まで、榊が差し替えられるのは年中四度の祭の時だけであり、九月の神御衣祭の時の榊のまま神嘗祭が行われた。『皇太神宮儀式帳』の太玉串も祭祀後置かれていったものが天八重榊であるという説もあり、また、伊勢では古い榊に対する聖性が現在も見られる(原田敏明「榊巻き」「神と社」)ことから、樹木崇拜とは違う観念がここではあると考えられる。

ミルチャ・エリアーデは、聖なる石、聖なる木は、石として、あるいは木として崇拜されるのではなく、それらが崇拜されるのは、それが聖体示現(ヒエロファニー)であるからである、と言っている(ミルチャ・エリアーデ『エリアーデ著作集』)。古代神宮において、太玉串、八重榊、宮飾りの榊は、「聖なるもの」の顕現に近い位置にあり、それらは、天照坐太神の祭祀にはなくてはならないものであった。

神話を再現するということは、神の時間へ帰入することである(『エリアーデ著作集』)、とエリアーデは言う。『皇太神宮儀式帳』には、太玉串行事は神話の再現であると記載されている。神話の祭祀は、磯部氏が奉仕氏族としての正当性を証明する為だけのものではなく、古代の人々が、天照坐太神の顕現と

永遠を願って行った姿があるのではないかと考えられる。

上代における祈りの変容

白江 恒夫

「祈る」は、上代(奈良時代とそれ以前)では「神を祈る」という表現が主で、今日普通に用いる「神に祈る」という表現は厳密な意味での用例が見当たらない。そこで、確実な仮名書き例のある万葉集と続紀宣命を用いて「神を祈る」と「神に祈る」を考えてみたい。

一、イノルの語構成と語義。イノルの語構成はイ(斎)ノル(告)で、普段口にしない特別な発言を神聖に行う意。新撰字鏡に「託。禱也。註也、イノル又クルフ」等とある。狂フとも読み得た「託・禱」の訓イノルは、一種異様な状態での発言をさしたと考えられる。

二、漢字「祈」「禱」の意味。日本語イノルには「祈・禱・祈禱」等の漢字や漢語をあてることが多いが、漢字「祈・禱」には、神に叫び告げて助力を求める意があった。「掌六祈(鄭玄注)祈、嘯也、謂為有災變、号呼告于神、以求福。」(周禮、春官、大祝)とあり、「禱祠于上下神示(鄭玄注)求福曰禱」(周禮、春官、小宗伯)とある。これらの「福」は神の助けの意(「福」、説文、祐也)『集韻』であるから、「求福」は神の助けを求める意。

三、神ヲ祈ルと神ニ祈ル。日本語イノルは、神聖に告る(呪的に言う)ことだから、「神を祈る」とは、普段口にするのを憚る神名を特に口にすることを意味した。神の助けが是非必要だ